

252. 高宮道の常夜燈

1. はじめに

滋賀県犬上郡多賀町多賀に所在する多賀大社は「お伊勢七たび 熊野へ三度 お多賀さまへは月まいり」と唄われ、伊勢神宮の祭神天照大御神の親神である伊邪那岐命、伊邪那美命を祭る神社として古くから信仰を集めてきた。特に江戸時代以降、庶民が容易に神社仏閣を巡る旅に出られるようになると伊勢神宮や讃岐の金毘羅宮、西国三十三所観音霊場などと共に全国から参詣者が訪れるようになった。

今回は多賀大社への表参道であった高宮道に所在する常夜燈から近世末期の多賀信仰の広がりについて見ていきたい。

2. 高宮の常夜燈

中山道高宮宿から多賀大社に向かう高宮道でもっとも目立つ石造物は中山道に面して建つ多賀大社の一の鳥居（寛永12年建立・県指定文化財）であろう。この横には見過ごされがちながら高さ5mを越える堂々とした常夜燈が1基だけ建っている。

この常夜燈は、方形の平面をもつ宮前式と呼ばれるもので、石垣と長方形の切石を組み合わせた階段状の基壇上に台石、竿、中台、火袋、笠、宝珠の順に組み上げられている。火袋は四方に正方形の窓をもち、窓に木製の格子がはめられている。中台には中山道の逆側に、灯火を燈すための階段が掛けられている。銘文は竿の中山道側に「多賀大社」、高宮道側に「常夜燈」と太く崩し気味の字体で刻まれており、建立年月日や寄進者名などが記されていない。

この常夜燈はもともと鳥居の東西に1基ずつ設置されていたものであるが、現在は西側のものだけが残り、高宮郵便局側にあったものは高宮道を2kmほど南東に進んだ所にある多賀大社御旅所の広場（多賀町尼子・草の根広場）へ移設されている^①。

3. 尼子の常夜燈

尼子に移された常夜燈は街道に面する北西側を正面として建っており、中台に掛けられた階段が撤去されている点などを除いて、鳥居横のものとはほぼ同形である。竿には高宮のものとは逆に「多賀大社」と刻まれた面の右側に「常夜燈」と刻まれており、高宮道を挟ん

で左右に建てられていたことを示している。

尼子の常夜燈と高宮の常夜燈で大きく違う点は尼子のものには明治24年（1891）の移設に際して竿の部分に追刻がされており、これまでの経緯を知ることができることである。左面に「文政十一年創建 北川善兵衛」「明治二年再修発起人 北川忠四郎」とあり裏面に「明治廿四年 移築 発起人 北川□(不明)兵衛」（以下3名省略）と記るされており、この常夜燈は文政十一年（1828）に建立され、明治2年（1869）に一度修理され、その後明治24年（1891）に現在の場所に移築されたことがわかる。

さらに、台石と基段の上2段の側面には再修の際のものと思われる寄進者名とその住所が4面すべてにびっしりと刻まれており、風化や破損のため判読できない部分もあるが台石の裏面にあたる南面右端より「再建施主」として325名の名前がみえる^②。寄進者の大半は地元近江国であるが、東日本を中心に遠くは新潟にまで及んでいる。

再建の時期は、年号等の記載がないものの寄進者の所在地に「江戸」と書かれた例と「東京」と書かれた例があることや「大阪」と「大坂」と2種類の漢字を使っていることなどから、江戸時代からほど遠くない明治時代とみられ、竿に記された明治2年の再修にともなうものであろう。



高宮の常夜燈



尼子の常夜燈

4. 再建寄進者の分布

燈籠に記された地名のうち判読できたものをみると、近江国では葛籠町、彦根など多賀大社のある犬上郡が13例ともっとも多い。次いで神崎郡の5例、愛知郡・蒲生郡の4例と続き、坂田郡の3例、野洲郡・甲賀郡の2例、滋賀郡・伊香郡の1例となり、それらより遠い栗太郡や高島郡、西浅井郡などの地名は見当たらなかった。つまり、多賀大社のある湖東平野に寄進者の分布の中心があり、距離に比例して減少する状況が読み取れる^⑧。

一方、他地域の地名は近畿から中部、関東にかけて31例確認できたが、これらは多賀大社からの距離に関係なく分布しており、江戸（東京）や大阪、京都といった大都市や名古屋、岐阜、松本などの城下町、三国湊、新瀧など港町、谷村、竹鼻など郷町であり、一般の農村は見当たらなかった。

つまり、他地域の寄進者は中部を中心とする東日本に広く分布しているが、江戸や城下町、在郷町といった地域の中心やそこへ至る港町など交通の要所に点的に分布していることがわかる。これは同心円的に寄進者が分布する近江の在り方と大きく異なる。

5. 多賀大社坊人の活動

このように多賀大社が全国的な信者の広がりを持ちえた理由のひとつに不動院を中心とする神宮寺とそれに付属する坊人組織の存在が挙げられよう。

多賀大社の神宮寺は明応三年（1494）に創建された別当寺院の不動院のほか、般若院、成就院、観音院が存在し、それに属する坊人は伊勢神宮の「御師」や高野山の「高野聖」など同様に全国の信者に多賀大社のお神札を配布するとともに、社殿の造営に際しては諸国で費用の勧進を行い、遠方の信者が参詣する際の道中案内など先達の役割も果たしていた。

「観音院古記録」によると、安永八年（1779）の観音院の坊人は71名おり、その多くは甲賀郡に居住し、地域ごとに「塩尻組」、「大組」などの組を造っていたようである。また、天明二年（1782）の「諸国人数改帳」によると重複はあるものの組ごとに数ヶ国の担当地域が決まっており、例えば「塩尻組」では尾張、信濃、美濃など19ヶ国で活動していたことが記されている^⑨。尼子の常夜燈の再建にもこういった坊人達が深く関わっていたとみられる。

6. まとめ

尼子の常夜燈の寄進者の分布は近江においては多賀大社のある犬上郡を中心として、距離に比例して減少するパターンを示す。これは坊人との関係というよりも「お多賀さまへは月まいり」というように日常的に多賀大社と直接的に深い繋がりをもっていた近隣の信者の分布を示しているといえよう。これは多賀大社の古例大祭の馬頭人が、この地域からのみ選出されていたことと符合する。

一方、その他の地域において寄進者が距離に関係なく城下町や宿場、港などに点的に分布するあり方は、人々が集まる拠点ごとに行われた坊人達の勧進活動によって獲得された信者の分布を示しているといえよう。

つまり、常夜燈からみた近世末期^⑩における多賀大社の信者の分布圏は、古例大祭などを通じて古くから直接的に大社と密接な繋がりのある氏子圏としての湖東平野地域と坊人やそれを核として作られた講組織を通じて間接的に大社とつながるその外側の地域に分かれていたといえよう。（北原 治）

註

- ①滋賀県文化財保護指導員 南畑憲三氏のご教示による。
- ②「瓦屋中」や「東世講中」などの団体も1名として数えることとした。
- ③寄進者の分布について考察するためには、本来ならば各地域の寄進者を比較するべきであろうが、風化により判読不可能なものや代表者のみの記載とみられるものもあり、単純に比較できない。そのため地名数の比較とした。
- ④藤村滋「多賀信仰のあゆみ」『多賀信仰』1986
- ⑤燈籠再建は明治2年であるが廃仏毀釈の波にのり実施された大社の神宮寺破却（明治4年）や坊人組織の再編（明治9年）以前であるため、近世期の状況を示していると思われる。

参考文献

- 『多賀信仰』多賀信仰編集委員会編、1986
 藤村滋「多賀信仰」『お多賀さまへは月まいり』彦根城博物館、1994
 『多賀大社叢書』多賀大社叢書編集委員会、1975～

尼子常夜燈再建寄進者の所在地

地域	地名
近江	犬上郡：彦根◎、多賀、葛籠、石畑、西今、野瀬、松原、極楽寺、八坂、中村、八目、清水、野田山 神崎郡：川並、町屋木流、本庄、乙女浜 蒲生郡：八幡◎、日野◎、麻生、横関 愛知郡：長野、芝原、藤原、海瀬 坂田郡：米原、米原濃、不明1 野洲郡：野洲、堤 甲賀郡：信楽2 滋賀郡：堅田◎ 伊香郡：菅並
近畿	摂津：大阪、大坂 山城：京、京三条
中部	尾張：名古屋2◎ 美濃：岐阜3◎、竹ヶ花◎、天王◎ 信濃：飯田2◎、松本◎、口屋 甲斐：ヤムラ◎ 遠江：浜松◎
北陸	越前：敦賀★、三国湊★ 加賀：金沢◎、宮ノ腰★ 能登：中居◎ 越中：富山◎、滑川★ 越後：新潟★
関東	江戸：日本橋、品川、汐留、新泉町 神奈川：横浜★

※2回以上記載のあるものについては回数を示した。 ※◎城下町、○在郷町、★港町

253. 近江町箕浦城・浄蓮寺遺跡出土の磨製石斧と土器に付着する赤色顔料について

みのうらじょうじょうれんじ

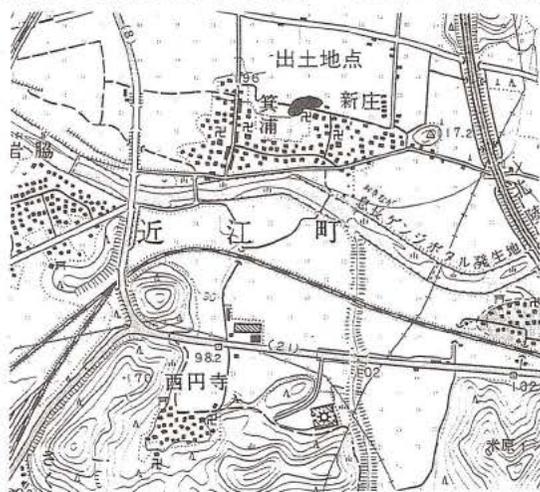
1. はじめに

今回紹介する磨製石斧は、平成3年3月に刊行した箕浦城・浄蓮寺遺跡の報告書^①では未報告のものである。また、赤色顔料付着土器は、報告の際、顔料の種類は不明であったものである。今回報告する機会を得たので、これらの遺物について紹介することとする。

本遺跡は、坂田郡近江町の天野川右岸に位置している。地形的には、天野川が造り出す自然堤防上にある。

遺跡は発掘調査の結果、縄文時代後期の住居などの遺構群や中世箕浦城などの遺構が確認されている。

赤色顔料の付着する土器は、S155とした土坑の埋土上層から出土したものである。この遺構からは、多数



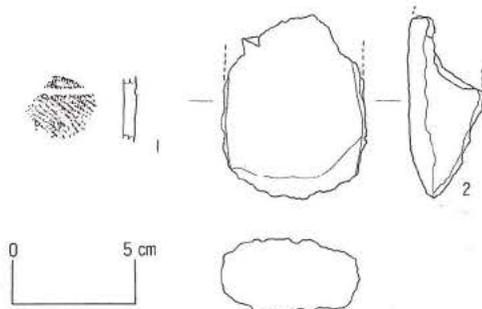
第1図 遺跡の位置

の土器が出土し、それらの土器から中津Ⅰ式新段階に相当すると考えられる^②。赤色顔料付着土器(第2図1)は、有文精製土器の体部片である。報告の際、断面の丸程度が丸くなっている点から、土製円盤の可能性を指摘したものである。赤色顔料は、外面の縄文の節中にわずかに残っている。その部分に蛍光X線を照射した結果が表1である。表1でもわかるように、Feが多く、赤色顔料はベンガラであることがわかる。

磨製石斧は、箕浦城の堀であるS332より出土している

表1 蛍光X線分析データ

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Fe	73.5834	917.02	6.686
Ti	5.4655	29.43	1.560
K	14.6290	20.28	1.447
Sr	0.4556	15.53	2.340
Ca	5.8665	15.00	1.294



第2図 箕浦城・浄蓮寺遺跡出土遺物実測図

る。石斧は、刃部付近のみ残存している。残存長7.5cm、幅5.7cm、厚さ3.0cm、重さ144.1gを測る。石斧の表面には、多数の凹凸が認められる。これは、被熱等により二次的な変化によって岩石中の鉱物が剥落した結果生じた可能性が指摘できる。伴出する土器がないため時期の確定はできない。しかし、周辺状況から考えれば、中津式期の可能性が考えられる。

以上紹介した遺物のうち、赤色顔料の分析例については、滋賀県においてもかなり類例が多く増えてきており、今後水銀朱とベンガラの使用について時間的変遷を考える際、事例の1つとして貴重な資料となるであろう。今回、報告するにあたって、中川正人氏により赤色顔料の分析結果を頂いた。また、渡辺直哉氏には石斧の実測を行って頂いた。記して感謝したい。

註

- ①中村健二編『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVIII-9 箕浦城・浄蓮寺遺跡-』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1991
- ②報告書では、筆者の勉強不足から中津Ⅱ式段階としていた。この場を借りて中津Ⅰ式新段階と訂正しておきたい。(中村 健二)

254. 近江八幡市後川遺跡出土の石器について

うしろかわ

1. はじめに

今回紹介する石器は、平成4年3月に刊行した金剛寺・後川遺跡の報告書^①では、時間的都合から報告できなかったものである。今回、報告する機会を得たので、これ遺物について紹介することとする。

本遺跡は、近江八幡市杉森町に所在しており、石器は平成3年度調査のT13-P150より出土した。P150は、縄文時代晩期最終末の自然河道で、比較的多く土器や石器が含まれていた。出土した石器は明確な製品は存在しておらず、その大半が剥片類である。それら



第1図 遺跡の位置

の石器を石材別に見れば、サヌカイト製9点、片岩製1点、ホルンヘルズ製1点とサヌカイトが多い。この傾向は、近畿地方の縄文遺跡と同様であるといえる。

第2図には、その中から石核(1)、微細剥離痕のある剥片(2)、楔形石器の可能性のあるもの(3)、石斧などの剥片(4)を掲載した。1は、長さ6.0cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm、重さ30gを測る。表・裏面および一方の側面には礫表が残っており、サヌカイト原石は手に乗る大きさであったと考えられる。この石核は、基本的には縦長剥片を取っている。2は、長さ4.0cm、幅3.6cm、厚さ0.65cm、重さ9gを測る。サヌカイトを素材とした縦長剥片で、裏面の両側に微細剥離痕が認められる。

3は、楔形石器の可能性のある剥片である。裏面の上方には階段状の剥離が認められる。しかし、下方は折れのため、本来階段状剥離があったのかは不明である。剥片の上下端に階段状剥離が認められないことから、楔形石器とするにはやや問題がある。サヌカイト

製で、大きさは長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1gを測る。4は片岩製の剥片である。大きさは長さ7.2cm、幅5.7cm、厚さ0.5cm、重さ26gを測る。片岩製で薄い剥片であることから、打製石斧あるいは、石庖丁のようなものの剥片であると思われる。

現在、滋賀県の凸帯文期の石器については、まとまった研究がなく、石器の素材がどのくらいの大ききで搬入されているかも明らかになっていない。1のように、手の中に入るくらいの大きき素材の搬入がこの時期一般的であったのか、それとも遺跡によってこうした違いが生じているのか、今後の検討課題の1つであるといえる。

製品についてみれば、管見では、県内の凸帯文期の楔形石器の報告例はなく、比較的多く出土した大阪市長原遺跡^②と対照的な様相を示している。しかし、同時期と限定できる資料がほとんどないことなどから、今後、楔形石器の出土例も増加するかもしれない。また、打製石斧も本県では比較的目立って存在している。この点も長原遺跡の状況と違いをみせている。こういった点が地域性を表わしているのかということについても、今後、検討されるべき課題の1つであるといえる。

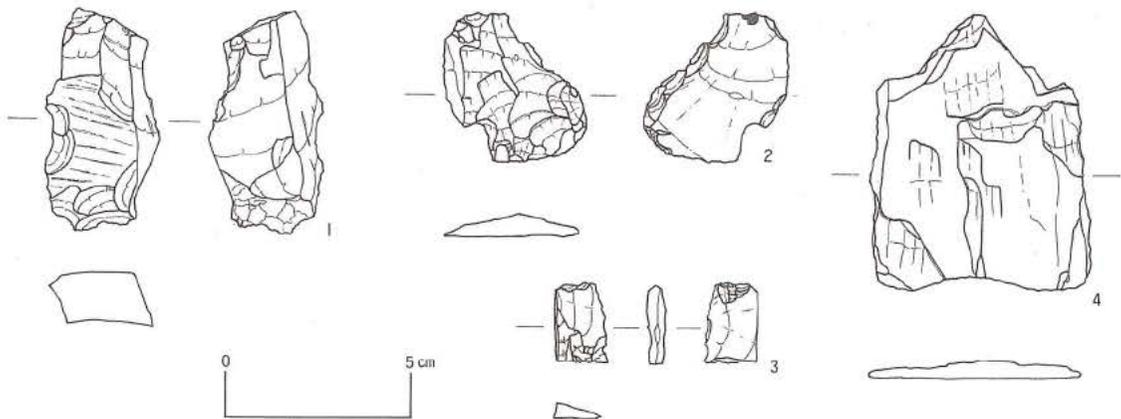
今回報告した製品以外の石器も今後研究の課題として多に検討される必要があると思われる。

本文作成において同僚の鈴木康二氏から多くの教示を得た。しかし、著者の力量不足から十分に生かせなかった。

(中村 健二)

註

- ①中村健二編 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X IX-8 金剛寺・後川遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1992
- ②山中一郎他 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II』(財)大阪市文化財協会 1992



第2図 後川遺跡出土石器実測図